

季節風

北海道医報購読料年間3,000円。北海道医師
会員にあっては会費の中に含まれています。

病名と国名 ……中国肺炎



情報広報部 山本 直也

6月末に何とかSARS（重症急性呼吸器症候群）が本家のシナ大陸で終息に向かいつつあるとの報道がなされる中で、カナダと同様に直後に新たな感染者と死者がでて、WHOの一部の専門家らの危惧するこの冬が本番という不気味な推測が現実味を帯びはじめている。

一方、昨年アメリカで大流行し44の州で死者284名を出した西ナイル熱が今夏の日本に上陸するのではとの警鐘が鳴らされている。

同時に、またもと言うかやはりと言うか、広東省で日本脳炎が死者25名、感染者が296名と蔓延し中国政府衛生省は香港紙が6月はじめから警告してきた報道を正式に認め、この事態を重視した対策を明らかにした。久しぶりに亡霊のような日本脳炎という病名に触れて、懐かしいというか日本住血吸虫などという細菌学・病理学の教科書でしか見たことのない病名も思い出した。考えてみると、風土病はもちろん国名や地名のついた病名はそこに住む人間にとっては決して名誉なことではなく、逆に厭わしい蔑視につながるものである。歴史的にも梅毒のことをドイツ人はフランス病Franzosenkrankheitと蔑称し、フランス人も人のことは言えなくて、ナポレオン戦争の時にイタ

リア戦線でナポリ病と蔑んでいた。もっとも有名なのは世界的な大流行で2,000万人が死亡したという1918年スペインから始まったというスペイン風邪で、筆者は浅学にしてその名前の真の由来を知らないが、第一次世界大戦でドイツが敗れた第一の要因が後に1933年に分離・同定されたこのインフルエンザ（イタリア語）Aウイルスによることはよく知られている。この発生地が今回のSARSと同様に四川省・広東省であることが鳥類・豚・人の濃密な混在、地理的要因など含めて疫学的に広く研究されている。

今回のSARSをロシア人が中国肺炎と呼称・蔑称していることがニューズウィーク誌らに報道されているが、ネーミングから言えばまことに簡にして要を得た病名と言えるが、いまの中国人では侮蔑されたと反発し激怒するだけであろう。つい10年ほど前には、実験動物室のげっ歯類から感染して死者がでて大騒ぎになった韓国熱、デング熱の仲間のアルゼンチン出血熱など国名のついた病名も知られているが、最近ではアメリカ人が心臓病・高脂血症・糖尿病・肥満・過食・運動不足ら、いわゆる生活習慣病と癌の多発高死亡を率直にアメリカ病と言わずに西洋病とすりかえて躍起になって健康維持に目の色を変えている。一方、病い違いではあるが、イギリス病と揶揄されながらも悠然と受け流して大国の度量を示しつつ着々と問題を解決して国際的威信を保持しつつけるイギリス、最近の日本も日本病などと陰口を叩かれているようであるが、高度先進社会主義国家と揶揄されようと大国らしい度量で淡々と目前の解決すべき課題を現実的に処理し、より優れた医療・社会保障制度を基盤として強化しながら安全で豊かな社会モデルを世界に提示していくことが求められている。アメリカ病が真摯に受け止められて解決に向かうとき、米国も成熟した大国になっているであろうし、中国肺炎が抵抗なく一般に受け入れられる頃には、アジア大陸もゆたかな時代をはじめて迎えているのかもしれない。